

表紙の解説 戦国武将の眼病事情

谷原秀信



(永青文庫所蔵)

図1 細川忠興の肖像画



図2 伊達政宗騎馬像(仙台市, 仙台城)

はじめに

本シリーズにおいては、わが国の近代眼科を構築するにあたって重要な役割を果たした先達を取り上げてきました。史料が豊富にあること、組織上のつながりは現在に残っているものの、直接的な縁故者や利害関係者が限定されることで、比較的遠慮なく執筆できるという観点から、主として幕末から明治期にかけて活躍した眼科医を題材にしてきました。しかし今回は、少し趣向を変えて、時代を遡って、戦国時代から江戸初期にかけての日本の眼科について解説してみたいと思います。さらに眼科医側ではなく、患者側の視線で当時の眼科について、文献を引用しながら考察してみたいと思います。

患者側からみた日本における眼病事情については、諸文献に散見されており、眼科医側からみた記述とは、また異なる趣があり、興味深い

ものがあります。今回の表紙で取り上げた眼病の患者は、細川忠興(図1)です。

眼病を患った戦国武将「独眼竜」伊達政宗

戦国時代から江戸初期にかけて天下布武を目指して活躍した武将の中で、眼の異常について一番有名なのは、やはり「独眼竜」という異名を持った仙台の覇者・伊達政宗でしょう(図2)。伊達政宗は、永禄10年(1567年)に出羽国で伊達家の嗣子として誕生し、幼名は梵天丸です。彼が隻眼であったことは有名ですが、実際には、その原因については諸説あります。映画では矢に射られて失明したと描写されていますし、政宗本人が、「木登りをしていたら落ちてしまって、その際に目玉が飛び出してしまったのだが、その目玉があまりに美味しそうだったので、食べてしまった」などと無茶苦茶な説明をしてい

たという逸話も残っています。ただ実際のところは、疱瘡(天然痘)により幼少期の頃に右眼を失明したといわれています。ただ彼自身は、実は隻眼となったことを恥じていて、親から賜った大切な眼を失ったことは親に対する不孝であると考え、彼の木像や肖像画は、すべて両目が入れられていたとのことでした。

ちなみに彼を評するのによく用いられる「独眼竜」という呼称は、元来は、9世紀末、唐末期に実在した武将である李克用の渾名です。黄巢の乱によって唐王朝が滅亡を迎えた時に活躍し、朱全忠と激しい権力闘争をした有名な軍閥指導者となりました。彼が“眇(すがめ)”であったことから、独眼竜と呼ばれたそうです。“眇”は、片眼が極端に小さいことを表現する言葉ですが、斜視にも用いられることがあります。いずれにせよ、江戸期の文人、頼山陽が伊達政宗を評するのに史上有名な李克用になぞらえたことで、李克用の渾名も一緒に、政宗を表現するのに流布したようです。伊達政宗は、有名な漢詩「酔余口号」を残しており、「馬上少年過、世平白髪多、殘軀天所赦、不樂是如何」と謳いあげました。自らの野心に満ちた若き日に思いを馳せながらの鬱屈した老齡の心境を嘆じた詩といわれています(一説には、余生を楽しもうというポジティブな気持ちを表現しているともいわれていますが)。司馬遼太郎からも、その詩才は高く評価されて、伊達政宗を題材として「馬上少年過ぐ」という表題の小説が執筆されていますが、この表題は当然、上記の漢詩に由来します。時代に遅れて出現した戦国時代の英雄として、不本意にも時の政權下に従属せしめられて、豊臣政權から江戸幕府の創設期を辛くも生き残り、伊達家が仙台藩62万石を勝ち得るとともに、庶長子伊達秀宗は宇和島藩10万石の大名となりました。晩年は、愛嬌のある、けれども武骨な御老人としての逸話が多く、三代将軍家光から父親のように慕われ

ていたと記録されています。

徳川家康の眼鏡と藤堂高虎の失明

歴史の書籍や史料を読んでいると、意外にも眼病に苦慮した武将たちが多かったことを知ることができます。伊達政宗のように幼少期の疾患や外傷による隻眼はともかくとして、功成り名を遂げたかつての戦国武将たちの中には、江戸幕府の統治の下で長寿を全うした者も多いのですが、加齢に伴って、さまざまな眼症状を生じたようです。

たとえば、江戸幕府を開府した徳川家康は、天文11年(1542年)、三河国岡崎で松平家の嗣子として誕生します。幼名は竹千代です。彼の生涯については、あまりに有名なので、ここでは解説しませんが、享年75歳で逝去しました。晩年、眼鏡を掛けていたことが知られており、彼眼鏡と推定されたものが久能山東照宮に残されていました。この眼鏡は、現在のものとは形態が違って、手で持って見る鼈甲縁の鼻眼鏡ということです。ただ輸入された眼鏡が、有力者に重宝されていたということであれば、基本的には老眼鏡であろうかと推測します。もっとも徳川家康が眼鏡を所有していた最初の人というわけではありません。彼以前にも眼鏡を所有していたという記録は残されています。眼鏡の日本への伝来についても諸説ありますが、一般的には、イエズス会の宣教師フランシスコ・ザビエルが来日した際(1549年来日、翌1550年に周防へ移動しました)に、周防の大名であった大内義隆に献上したのが始まりであろうといわれています。ただ室町幕府の12代将軍足利義晴が所持していた眼鏡が残っていますから、いくつかのルートで輸入されて、権力者たちの手に渡っていたのだらうと思われる。

藤堂高虎は、私が昔から興味を持っていた武将の一人です。弘治2年(1556年)、近江国で

土豪の次男として生まれました。伊達政宗が、派手な言動で周囲を攪乱しつつも、辛うじて生き延びたことは、凄腕の政治家のなせる技というべきかもしれませんが、実際のところ、かなり危ない橋を渡っています。どちらかといえば、天下の趨勢に追従し損ねたがために、一步間違えば破滅したであろう「累卵の危うき」の印象があります。これと好対照なのが、藤堂高虎です。彼は、織豊時代から江戸期にかけて、時代の変遷に伴って、何度も主君を変えたことで、批判されることも多いのですが、彼自身は「武士たるもの七度主君を変えねば武士とは言えぬ」と言い放っていたそうです。江戸期に朱子学が普及する以前、自らが主君を選ぶという気概を持った戦国武将の一典型ではあるかと思えます。浅井長政、浅井家の旧臣・阿閉貞征、同じく磯野員昌、さらに織田信澄、そして羽柴（豊臣）秀吉の弟である秀長、秀長の没後は豊臣秀保から秀吉自身に仕えて、秀吉の没後は、徳川家康に急接近して、その最も重用された側近として活躍しました。家康に仕えるまでの藤堂高虎は、主君の巡り合わせが悪く、次々と没落し、あるいは死別したことで、めまぐるしく主君を変えるのですが、そのいずれにおいても、巨軀を奮闘させた武将として、あるいは築城の名人、優れた能吏、そして策謀を巡らす幕僚としても、非常に有能であり、きわめて多才な人であったようです。小説や映画で描かれる藤堂高虎は、作者が批判的な立場をとるか、肯定的な立場をとるかで驚くほど、描かれようが異なっていて、ずっと気になる人物でした。最近では、どちらかといえば再評価の機運が高まっています。肯定的に評価する作品が多いように感じます。藤堂高虎は、徳川家康に仕えたことでようやく安住の立場を見出しました。家康の最期にあたっては、枕元に侍ることを許されるほどの信頼関係を結びました。関ヶ原の合戦以降は、徳川軍の先鋒は、有力な譜代大名である井伊家

とともに、藤堂家が務めるのが慣わしとされるほどです。譜代以上の信用を得た藤堂高虎ですが、75歳の長寿を全うして、没しています。ただし彼は、晩年、失明に近い重篤な視機能障害を嘆いていたことが記録されています。長寿を全うした戦国武将たち、その後半生に栄達を遂げて江戸初期の大名となった彼らは、晩年に視機能障害に苦慮することになりました。その中でも、眼病にかかわる詳細な記録を残した筆まめな患者が、今回の本題である細川忠興です。

細川忠興という人

細川忠興(三斎)()は、永禄6年(1563年)、藤孝(幽斎)の嫡子として誕生し、青年期は、織田家の家臣として、織田信長による天下統一に貢献しました。天正10年(1582年)、「本能寺の変」の際は、明智光秀の寄騎としてその軍団統率下にあり、忠興の妻伽羅奢(ガラシア)が明智光秀の娘という縁戚関係を取り結んでいたのですが、明智方に加担することを拒み、むしろ積極的に旗幟鮮明にしたことで、豊臣政権樹立に貢献しました。さらに慶長5年(1600年)、関ヶ原合戦で功績を残して、慶長7年(1602年)、論功行賞で小倉藩主となりました。その後、江戸幕府が開府された後、元和6年(1620年)、三男忠利に家督を譲り、加藤家の没落によって、忠利が初代の肥後熊本藩主となり、忠興自身は、八代の地に隠棲しました。このように、忠興は、優れた武将であると同時に辣腕の政治家として、織豊時代から江戸初期にかけて、栄達を遂げたのですが、その過程の中で、妻ガラシアを自害させ(厳密には、キリスト教信者であったガラシアは、家臣に自らを刺殺させます)、長男忠隆を廃嫡し、次男興秋は出奔後に切腹へと追い込むという苛烈な人でした。他方、忠興は、千利休の高弟として、「利休七哲」の一人に数えられ、豊臣秀吉により利休が処罰さ



(小倉城八坂神社所蔵)

図3 細川忠興の眼病平癒を祈念して家臣が寄贈した石造灯籠とそのレプリカ
灯籠には、「為豊之前後両国之大主相公御眼病御平癒 元和四年三月七日」と刻んである。

れた時に、利休を見送ったのは、数多いた弟子の中で、古田織部と細川忠興の二人のみであったといわれています。ちなみに、細川忠興が伝えた肥後古流は、利休の茶道流儀を最も忠実に伝承しているといわれており、勇猛な武人であると同時に、厳格な美意識に生きた文化人としての一面もあり、愛憎の深い不思議な陰影を持つ武将です。この忠興には、眼病を煩っており、眼科医の診察を受けていたという史料が残っているのです。

細川忠興の眼病平癒を願った石灯籠

細川忠興の小倉藩時代に、彼の家臣団が、主君である忠興の眼病平癒を祈って石灯籠を神社に寄贈したこともあり、この石灯籠は今も小倉城内にある八坂神社(当時は祇園社)境内に現存しており、福岡県指定の有形文化財に指定されています(図3)。その石造灯籠の表面には「為豊之前後両国之大主相公御眼病御平癒」と刻み込んであり、豊前、豊後の両国を采配した細川忠興の「御眼病」の平癒を祈念した家臣達の思いを知ることができます。神社に伝わる言い伝えでは、鷹に目を蹴られたが、神社を創建する

と治癒したなどと言われているようです。もっとも、それはいかにも当時の宗教観を反映させた作り話のように思われます。元和4年(1618年)の寄贈ということですが、この時期は、後述するように、確かに忠興の自筆書簡でも眼病に苦慮する様子が描かれているからです。それ以前からも眼病についての記述が残されており、一過性の外傷とは思えません。

細川家の家譜「綿考輯録」にみる細川忠興の眼病

細川家の家譜である「綿考輯録」(細川護貞監修、出水叢書にて刊行)では、忠興の眼病について、「安晴・利齋をはじめ爰元之目医師数人に養性させ候得朋、一切驗無之ニ付、従真嶋と申目医師呼下」という記事があります(「綿考輯録」巻二十、出水叢書版「第三巻 忠興公(下)」)。さらにその後、「京都ニ而上手之目医師一人御下候へと申遣候」とあります。さらに「土井大炊頭殿御肝煎にて、尾州よりも眼医参り」という記載があります。土井大炊頭とは、言うまでもなく、当時の幕閣における最高権力者であった土井(大炊頭)利勝であり、「御肝煎」とは徳川秀忠のお声掛かりであることを示しま

す。当時、土井利勝は、秀忠の信頼が厚く、幕閣内で権勢の絶頂期に到達しつつあった時期に当たります。日本史を読み解く上での参考書となる「日本史必携」(吉川弘文館)によると、徳川秀忠の死去は寛永9年、將軍職を禪讓して大御所になるのが元和9年であると記載されていますから、これらの眼病に関する記事があった元和4年(1618年)は、家康の死去後、徳川秀忠が二代將軍としての將軍親裁を本格的に開始した時期にあたります。また土井利勝は老中(「日本史必携」では、慶長15年補職、寛永15年に大老となっています)として、幕府の政治を采配していた時期ですから、最高権力者たちに愛でられた細川忠興の立場が鮮明になります。

細川忠興の自筆史料による眼病の経過

細川忠興が日本近世史学上で有名なのは、彼が膨大な数の書簡を息子である熊本藩の初代藩主・細川忠利に残しており、江戸幕府初期の日本近世史における重要な史料として扱われていることにも由縁します(現在、書簡の実物は、細川家から永青文庫史料として、熊本大学図書館に管理を委託されており、その内容については東京大学史料編纂所から刊行されて入手可能です)。上記の「綿考輯録」記載も、これらの書状をもとにして記載されています。そこで、細川家一次史料をまとめた「大日本近世史料 細川家史料」忠興文書をさらに詳細に調べてみると、多数の眼病に関する記載があることに気づきます。

たとえば、忠興の自筆書簡をみると、慶長七年六月廿四日書状にて、「此春より左ノ目見へかね申候、くすしとも二見せ候へハ、そこひにて候はん由候間」と記載があり、慶長年間から既に発症していることが窺われます。慶長七年八月廿九日書状に「大なこん殿方目煩申儀きこしめし候て、遠路書忝儀候」とあります。「大

なこん殿」は、当時大納言に就任していた徳川秀忠のことで、要するに、江戸幕府の権力者が、自分が眼病を患ったことをご存じになって書を送ってお見舞い下さった」ということを感謝して記録しているのです。

さらに、その後の忠興の自筆書状にても「此間くすしをかへ少よく候、可心安候、そこひニハ成間敷由候事」とあり、その後、「元和四年閏月三月」では、「眞嶋と申目醫師呼下」すもの、左眼は「今ハ二間三間先ノ人をハ見知申程ニ成候事」、右眼は「少も見え不申候」という有様です。今で言えば、右眼はほぼ失明状態で、左眼も実用視力を失いかけていとも言うのでしょうか。さらに元和四年書状では、「尾州眞嶋大法院」を招いた、あるいは「大坂眞嶋慶圓」の療治にて験を得た云々、と記載されていますが、その後、一進一退を繰り返しながらも、たいした改善はみなかったようです。また、眼治療として、赤い塗り薬を用いたという記載もみられました。

これらの書簡が他の記録とも合わせられて、細川家の家譜である「綿考輯録」にも引用されて、上記の記載になったものと推測できます。当時の大名たちの將軍や幕閣に対する遠慮と迎合の仕方は凄まじくて、細川家の書簡を題材として、東京大学史料編纂所の山本博文教授が「江戸城の宮廷政治 熊本藩細川忠興・忠利父子の往復書状」(講談社学術文庫)という書籍に解説しています。作者は、江戸城を舞台にした情報収集と政治的画策の凄みを、形を変えた闘争であると喝破して、「宮廷政治家」という江戸期には似つかわしくない表現をあえて、細川忠興に附したのです。

細川忠興を診察した眼科医について

忠興の残した自筆書簡を読んでいると、江戸初期の有力大名であった彼の眼病の治療には、

目医科

「眞嶋(まじま)」「尾州(尾張)」などのキーワードが出てくることに気づきます。忠興公は、地元の日医師(眼科医)、大坂、京都、尾州(眞嶋大法院)という順に、眼科医の診察を受けたことになり、今で言うところの、ドクターショッピングの嚆矢といえるかもしれません。素直に解釈すれば、やはりその順で眼科医としての権威があったということになるのかもしれませんが。尾張徳川家は、言うまでもなく御三家筆頭で、初代将軍徳川家康の九男義直が藩主であり、当時の幕閣中で最大の権力者であった土井利勝の采配で尾張から招聘される眼科医とすれば、「眞嶋(まじま)」とは、当時の眼科診療を扱う医師としては、相当の権威者であると考えられます。

富士川 游「日本医学史」(日進書院,昭和16年)の「江戸時代ノ医学・初世 眼科」の冒頭には「前期以来行ハレタル馬島・保積・山口・酢韶・橋本, 諸流眼科ノ外ニ, コノ期ニハ家里・井花・馬淵・笠原・田原・竹内, 等諸流派アリ」と記載されています。小川劍三郎「稿本日本眼科学史」(吐鳳堂書店, 明治37年)でも、「近世史」の章では、筆頭に馬島流(尾張國海東郡馬島村)が挙げられ、その後、穂住流(おそらくは保積と同意)、佐々木流、酢韶流、青木流、山口流、高田流、夢想流、家里流、馬淵流、笠原流、井花流、楠原流、田原流、竹内流、玉泉流、根來流、東城流、三井流、日下流、兒玉流、八幡流、服部流、谷川流、中目流、紫雲流、桑島流などが列記されています。諸流派の名称を眺めていると、両書の間でかなり重複しているのがわかります。また黒川道祐の「本朝医考」でも、馬島、佐々木、青木、須磨、穂積などが挙げられています。いずれの日本眼科史の研究においても、「馬島流」は必ず記載される中心的な存在でした。馬島流の盛名は、幕末・明治期に至っても衰えることはなく、天保の四大眼科の筆頭に挙げられ、「馬島、田原、諏訪、

土生」といわれています。このうち、馬島流は、尾張国馬島村にある明眼院系が正統であるとされます。田原流は、筑前(現在の福岡)の眼科名家であり、諏訪は竹内流、土生は本シリーズでも取り上げた江戸の土生玄碩の流派です。馬島流は、日本眼科の源流を構成する重要な系譜ですから、本シリーズ企画で、さらに詳細な解説をしたいと思いますので、今回は割愛させていただきます。

上記の「尾州眞嶋大法院」は、尾張国馬島村に居住する馬島明眼院系の眼科医である可能性が高いと考えます。眞嶋と馬島は、当時の古文書史料においては、同音異字で当て字を用いる例が頻出することから、おそらくは同音で当てた表記でしょう。実際に、馬島流の秘伝書を見ると、「眞嶋」「麻島」など多様な漢字を当てられています。しかも馬島流には、多数の流派・分家が存在して、本家争いをしていたという史実もありますので、地方に展開していく過程で、ことさらに異字を当てる場合もあったようです。

「大法院」という称号は、おそらくは「法印」の意であり、僧位のひとつで、法印大和尚位の略です。最高位の僧位になるのですが、権威づけのために濫用される場合もあったでしょうし、宗派によっても、その格付けは異なっただろうと思います。ただ馬島流の第12世澄圓が慶長17年(1611年)に入寂していることを考えれば、元和4年(1618年)に細川忠興を診察した眼科医であり、このような「法印」の称号を持ち、有力大名に対して名乗ることができた者としては、馬島流当主となっていた第13世圓慶法印であるかもしれません。ただし残念ながら、その推測を裏付ける一次史料にたどり着けませんでした。また、「まじま」流や「法印」も、それらの権威を借りるべく、縁故者だけでなく非縁故者にさえも、非公式に濫用されていた可能性も否定できません。ただ富士川 游「日

本眼科略史」207頁に記載された「徳川幕府の眼科侍醫」の章を読むと、「大成武鑑」では、寛永3年馬島目醫師 馬島安清の記載があると記載されていますから、幕府側でも眼科の権威としての馬島流を認知していたと思われます。また尾張藩は当然、徳川御三家の領土ですから、馬島流の当主は、徳川家となんらかの形で、交流があったはずです。しかし、馬島安清よりも以前には明白な眼科医の記載はなく、將軍秀忠や土井利勝の口添えがあったとしても、「眞嶋大法院」「眞嶋慶圓」も幕府に所属するものではないと思われます。他方、尾張藩から扶持をもらっていた眞嶋明眼院系の圓慶が、徳川家や天皇家ときわめて近い立場にあった細川忠興の治療に招聘されることは、それほど不自然ではないと考えています。当時の馬島流の当主である圓慶は、後年、御水尾天皇の皇女、三ノ宮に施術したほどの権威でした。

他方、「大坂眞嶋慶圓」については、よくわかりません。奥澤康正による論述を読むと、江戸時代の京都における眼科流派としては、前述の馬島流、その分派である馬島大智坊流に加えて、青木流、家里流、実相院流、崇徳院熊入流、神教流、田原流、瑞龍寺流、中目流、根来流。三ヶ島流、柚木流、吉田流、法雲寺流などの諸派があったといわれます。いずれにせよ、関西方面(いわゆる上方)と江戸の両者において、眼科医としては、馬島流が第一の勢威を誇ったことを疑う余地は少なく、他の流派にしても、馬島流(もしくはその源流である支那医書)の強い影響下にあったと考えられます。

馬島流の第13世は「圓慶」ですが、上記の「眞嶋慶圓」と同じ文字を入れ替えて使用していることとなります。当時の諱名(いみな)の風習は、いくつかのパターンがありますが、典型的なのは、上位にある者の名前の下に位置する文字を用いて、それを上につけるものです。その具体例として、細川忠興自身が、織田信長の

嫡子である織田信「忠」の偏諱を受けて、「忠」興とするがごとくです。あるいは、上位者に対して、その含まれる文字を用いないという形式もあります。いずれにせよ、「圓慶」と「慶圓」のように並び替えをするパターンは、偏諱としては、きわめて異例なので、直接の縁故者ではないのかもしれませんが。ひとつの可能性は、細川藩家士が大坂目醫師と尾州から招聘した目醫師を混同したことによって混乱による誤記が生じたということも考えられますが、「眞嶋慶圓」の名は、何度か繰り返されて記載されています。別の可能性は、明眼院系の総帥の権威を頼んで、意図的に類似した名称を名乗ったという可能性もあるのですが、それを断じるだけの根拠はありません。

おわりに

プラセボ効果かもしれませんが、細川忠興が眼科診療を受けて、「験があった(治療が奏効した)」と感じたことは幸いでした。ただ忠興自身による眼病経過の記録によると、結局は、実用視力を喪失して、近世大名にとって最重要な政治行事であった参勤交代すらできなくなりますので、江戸城を舞台に激しく政治折衝をしていた「宮廷政治家」(山本博文教授による細川忠興に対する表現)にとっては、不本意で辛い状況であったようです。馬島流が長年にわたる隆盛を迎えた由縁は、墜下法による白内障手術などの外科療法に卓越したからであるといわれていますが、細川忠興が眼科手術を受けたという記録は残っていません。功成り名を遂げて、大名となった権勢を子息に継承しつつ、体制下に安定した外様大名としての立場を確立した後、藤堂高虎や細川忠興は、実用視力を失いました。徐々に衰えていく視機能をもった大名たちは、なお所有する政治家としての野心や能力をためあまして、晩年にさぞ悔しい思いをしたであろう

目次

うと考えます。晩年の細川忠興は、視力喪失も関連しているのかもしれませんが、気難しい老人であったようです。彼の後継者である熊本藩主・細川忠利とその家臣団は、気性が激しく、この気難しい藩主の父に振り回されて、藩政を執行することになります。忠興自身は、享年83歳で他界します。高齢者のクオリティ・オ

ブ・ライフにとって、視機能が有する価値はきわめて大きく、近世大名である細川忠興の自筆書簡に記載された嘆きからは、眼病患者の切実な思いを察することができます。

〔谷原秀信：熊本大学大学院生命科学研究部眼科学分野〕

*

*